

応用課題

旧字体	筆写体	常用体
示神	神神	神
	無无	無
	堅埜	野
	所所	所
	過過	過
	事事	事
遙	遙	遙

神無月の頃、栗栖野とりの所を
 過ぎて、ある山里にたづね入る事
 侍りしに、遙かたなる苔の細道をふみ
 わけて、心細くすみぢりたる庵あり。

加藤 玲子 書

(つけペン)

〈読み〉

神無月の頃、栗栖野くるすのといふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵いほりあり。

〈大意〉

陰曆十月ごろに栗栖野という所を過ぎて、ある山里に訪ねる人があったので、遙かに続く苔むした細道を踏み分けて行くと、ひっそりと心細そうに住んでゐる庵があった。

〈作者〉兼好法師

(二二八四～一三五〇)

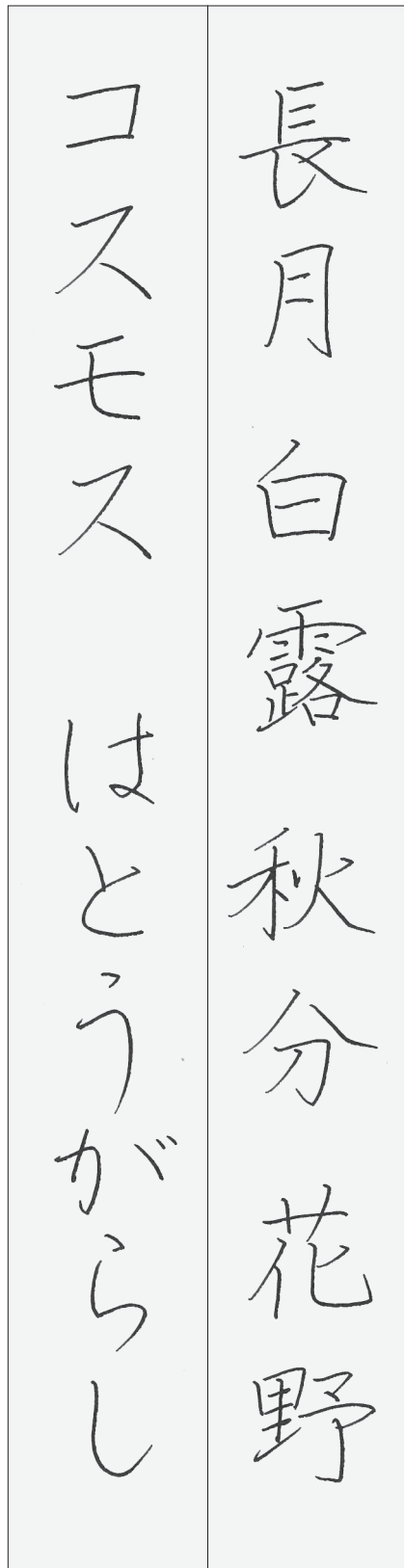
〈出典〉『徒然草』十一段

〈解説〉

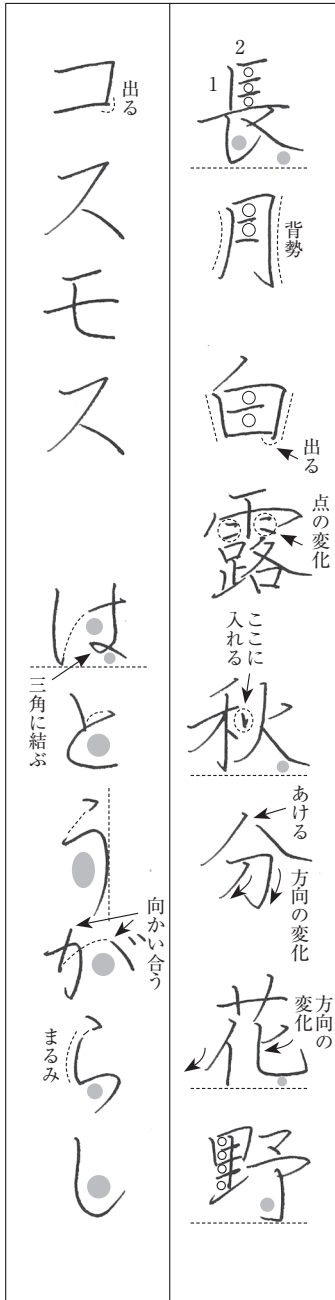
文字数から、どこで改行するか書く調子をみて行末揃うようにまとめましょう。行の隣り合う読点の位置にも注意するとよいでしょう。

基礎課題

福原 溪春書 (つけペン)



〈解説〉



〔読み〕 長月 白露 秋分 花野
コスモス はとうがらし

〔出典〕 『最新 俳句歳時記』

〔解説〕 「長月」：陰暦九月の異称。「白露」：二十四節気の一つ。白く露の結び始める頃で九月七日頃。「花野」：美しい秋草が咲きみだれた野。

※ペンを大きく動かし、伸びやかに書きましよう。

用具 つけペン、万年筆またはデスクペン、
ボールペン

つけペン ※用紙を縦にして縦書きとしてください。

堀津節子書

身にしみ

大根から

秋の風

〈読み〉

身にしみて大根からし秋の風

〈作者〉

松尾芭蕉

(一六四四〜一六九四)

〈大意〉

大根の辛さ以上に、木曾の秋風の寒さが身に染みる。

〈解説〉

連綿になっていないところも気持は続けて流れよく書きましよう。雅印は本文に関係なくまっすぐに押す場合が多くあります。

【用具】

つけペン、

万年筆またはデスクペン